

高校生の集団へのかかわり方と自己受容との関連についての研究

伊勢谷, 凡子
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/15703>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 6, pp.253-260, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

高校生の集団へのかかわり方と自己受容との 関連についての研究

伊勢谷 凡子 九州大学大学院人間環境学府

A study of the relationship between involvement a group and self-acceptance in senior high school students

Namiko Iseya (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study is to investigate the influence that involvement in groups exerts on the self-acceptance of senior high school students. In Study I, the influence that involvement in a significant group had on self-acceptance was investigated by administering the Self-Acceptance Inventory (SAI) to senior high school students. In addition, they were also asked about their involvement in significant groups. It was found that the deeper their involvement, the higher that their self-acceptance. In Study II, the influence that the involvement in family, extra curricular activities (clubs), and peer groups has on the development of self-acceptance was investigated. The SAI and questions about involvement in family, extra curricular activities (clubs), and peer groups were administered to senior high school students. Differences in attitude toward each group were not found, but the students who selected family from the 3 groups had higher scores on the SAI than the others.

Keywords: senior high school students, group, self-acceptance

問題と目的

従来、青年期は自己再構成の時期であり、「もはや子どもではないが、いまだ大人ではない」という境界期にあり、そのため不安定な時期であると考えられてきた。一般に、青年期といった場合、学校段階では中学生、高校生、大学生が青年期に当たるといわれているが、同じ青年期であってもその学校段階によって特徴が異なることが考えられる。よって、青年期について発達的に調べることで、それぞれの学校段階の特徴について捉えることができる。

青年期の内面についての発達的研究について平石(1990)は、自己意識における自己肯定性(自己への態度の望ましき)次元の発達について、高校生は中学生や大学生に比べて低くなっており、中学・高校・大学を通して見てみるとU字型の発達曲線を示すと述べている。また、加藤(1962)も青年期における自己受容と自己批判の年齢的変容についての研究の中で、高校生は中学生や大学生に比べて自己受容が低いという結果を示している。

ここで、高校生において落ち込みがみられた“自分を受容したり肯定的に捉える程度”について考えてみると、Rogers(1942)が“ありのままの自己を好きになること”と定義した自己受容とほぼ同じ意味だと考えることができる。つまり、自己の現実の姿についての正確な観察を行い、その姿をありのままに受け入れることであり、自

己に対する肯定的態度を指す概念として考えられている。よって、本研究では“自分を受容したり肯定的に捉える程度”を自己受容として考えることとする。

次に、青年期の対人関係についての発達的研究についてみてみると、まず、友人関係について落合・佐藤(1996a)が、青年期の友達とのつきあい方について、中学生、高校生、大学生を対象として調査している。その結果、中学生では同調や防衛的な傾向が高く、積極的相互理解が低くなっており、高校生では特に顕著に見られる友人関係がなく、大学生では同調が低く積極的相互理解が高くなっており、高校生は青年期における友人関係の大きな転換期であると考えられている。また、友達とのつきあい方のパターンについて発達的に調べたところ、中学生では「浅く広く関わるつきあい方」が多く、高校生では「深く広く関わるつきあい方」が多く、大学生は「浅く狭く関わるつきあい方」が多く見られ、青年期における友達とのつきあい方は、まず浅いつきあい方から深いつきあい方へと『友達との関わり方に関する姿勢』が変化し、次に広いつきあい方から狭いつきあい方へという『自分が関わろうとする相手の範囲』の変化が起こっており、高校生はその変化の転換期であると考えられていた。また、楠見・狩野(1986)は、青年期の友人概念の発達的变化について、中学生、高校生、大学生を対象として研究を行った。それぞれ自分の最も親しい友人の特徴について自由回答方式で尋ね、そこで得られた項目を行動上の特徴と性質上の特徴に分類したと

ころ、行動上の特徴の占める割合は年齢とともにU字曲線、性質上の特徴の占める割合は逆U字曲線を示し、高校生は性質上の特徴の占める割合が最も高く、行動上の特徴の占める割合は最も低いという結果となった。

青年期の親子関係を調べた研究では、落合・佐藤(1996b)が、中学生では「親が子を危険から守る親子関係」や「親が子を抱え込む親子関係」が多く見られ、大学生や大学院生では「子が親から信頼・承認されている関係」、「親が子を頼りにする関係」が多く見られるのに対し、高校生では顕著に多くみられる親子関係というものはなく、高校生を親子関係の転換期として捉えている。

また、青年期の教師との関係を調べた研究では、片岡・寺田(1982)が生徒から見た教師の人格特性に関して調査研究を行っている。その結果、「否定的教師像」の因子の評定平均が、小学校・中学校・高校と進むにつれて高くなり、「理想的教師像」の因子の評定平均は、小学校・中学校・高校と進むにつれて低くなっており、高校生の教師に対する態度は発達的に見て特に否定的であることが示された。

以上のように、高校生の対人関係は青年期における転換期として考えられている。このような対人関係が複数存在するものとして集団があり、高校生にとって日常的に存在する集団として、家族、仲間集団、部活動、学級を挙げることができるだろう。しかし、このような集団についての研究はほとんどみられない。そのような中、宮下・大野(1997)は大学生を対象として、「大学内での部活・サークル」、「大学外でのサークル・習い事」、「アルバイト・ボランティア」、「学科・実験・ゼミ」、「寮」、「その他」の中から現在最も力を入れている集団活動について関わり方を尋ね、アイデンティティ形成との関連を見出した。また、宮下(1998)も、大学生を対象として、クラブ(サークル)活動、アルバイト活動、ボランティア活動のそれぞれの集団活動への関わりとアイデンティティとの関連を見出している。しかし、以上で述べたように、対人関係の転換期であり、自己受容に落ち込みが見られた高校生を対象とした研究は見られない。

そこで本研究では、高校生を取り巻く日常の集団へのかかわり方が、高校生において落ち込みが見られた自己受容にどのように影響するのかみてみたい。しかし、ある集団へのかかわり方を尋ねるといっても、人によってその集団を大切だと捉える程度に違いがあると考えられる。

そこで、まず研究Iで、学級、家族、部活動、仲間集団の中から一番大切な集団を選択してもらい、その集団を想定して回答を求め、大切な集団へのかかわり方が深い方が自己受容が高いだろうという仮説を検証することを中心として検討する。

さらに、研究IIでは、研究Iで大切な集団を選択してもらった際、ある程度的人数が選択したいくつかの集団についてかかわり方を尋ね、それらの集団へのかかわり方と自己受容との関連について検討する。

高校生は、友人関係や親子関係、教師との関係のような人間関係における転換期であると。いくつかの研究によって明らかにされている(片岡・寺田, 1982; 楠見・狩野, 1986; 落合・佐藤, 1996a; 落合・佐藤, 1996b)ことから、集団へのかかわり方にも学年によって違いがあると考えることができる。従来、青年が頼りにする相手は親から同年代の仲間へと移行していくことが指摘されており、青年期の中期に当たる高校生は、その移行過程に当たるのではないだろうか。そして、高校生を発達的に調査することによって、移行の過程を捉えることができるだろう。また、高校生において部活動参加者は非参加者に比べて学校に適応している(白松, 1998)という報告もなされており、部活動参加者・非参加者の自己受容の違いについても確かめる。以上を踏まえて研究IIでは、以下の仮説を検証することを目的とする。

〔仮説1〕学年が上がるにつれて、家族へのかかわり方よりも仲間集団や部活動へのかかわり方が大きくなるだろう。

〔仮説2〕家族を最も大切だと答えた者は、そうでない者よりも自己受容が高いだろう。

〔仮説3〕低学年では家族へのかかわり方は最も大きい者がそうでない者よりも自己受容が高く、高学年では仲間集団や部活動へのかかわり方が大きい者はそうでない者よりも自己受容が高いだろう。

〔仮説4〕部活動参加者は、非参加者よりも自己受容が高いだろう。

なお、研究IIでは、性差と学年による違いについてもあわせてみていくこととする。

研究I：高校生の集団へのかかわり方が自己受容に与える影響について

目的

大切な集団へのかかわり方が深い方が自己受容が高いだろうという仮説を検証することを中心として検討する。

方法

調査対象 A県立高校の2年生201名(男子102名, 女子98名)。

調査時期と調査実施方法 2002年12月下旬に高校の教諭に依頼し、集団実施してもらった。

質問紙 以下の構成からなる質問紙調査を実施した。

1. 集団へのかかわり方を測る質問項目: 学級, 家族,

部活動、仲間集団の中から、自分にとって大切だと思う集団を1つ選択してもらい、その集団を想定して回答してもらった。項目は、宮下・大野(1997)で用いられた項目の因子分析の結果から、家族を想定した場合に答えにくいと考えられる「活動への傾倒」因子を除いた、「自己主張・存在感」因子と「仲間受容」因子とされた項目を、適切な表現に訂正し、また、全ての集団を想定した場合回答できないと考えられる「自己主張・存在感」因子の『その活動に関しては、自分は他の仲間より優れている方だと思う』の1項目を除いた12項目を用いた。評定は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5段階で回答を求め、それぞれ順に5点、4点、3点、2点、1点とした(逆転項目は得点が逆)。なお、「仲間受容」という名称は、家族を想定した場合はふさわしくないと考えられるが、宮下・大野(1997)の項目をそのまま使用している関係上、以後においても「仲間受容」と呼ぶこととする。

2. 自己受容を測定する質問項目：宮沢(1980)の作成した自己受容性測定スケール(SAI)を使用した。宮沢によれば、自己受容性は自己の諸側面をあるがままに受け容れること、と定義されており、本研究における自己受容の定義とはほぼ同じ意味をもつと考えられる。このスケールは自己理解、自己承認、自己価値、自己信頼の下位尺度から構成されており、全27項目から成る。評定は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5段階で回答を求め、それぞれ順に5点、4点、3点、2点、1点とした(逆転項目は得点が逆)。

結果

1. [仮説の検証] 集団へのかかわり方の High 群と Low 群間における自己受容得点の t 検定結果

大切な集団へのかかわり方が深い方が自己受容が高いだろうという仮説を検証するため、「自己主張・存在感」

Table 1
集団へのかかわり方の H, L 群における自己受容得点の t 検定結果

| | 群 (N) | 平均値 (標準偏差) | t 値 |
|----------|-------|---------------|---------|
| 自己主張・存在感 | H(92) | 100.22(10.26) | -9.06** |
| | L(69) | 86.34(10.97) | |
| 仲間受容 | H(99) | 95.97(12.50) | -4.86** |
| | L(69) | 86.87(11.61) | |

** p<.01

と「仲間受容」のそれぞれにおいて、中央値より値が高いものを High 群(以下, H 群)、中央値より値が低いものを Low 群(以下, L 群)として、自己受容得点の違いを調べるために t 検定を行った。なお、「自己主張・存在感」の中央値は32、「仲間受容」の中央値は15であった。その結果、「自己主張・存在感」と「仲間受容」の両方において、H 群・L 群間に有意差がみられた(Table 1)。よって、大切な集団において、自分の意見を主張したり存在感を感じたり、仲間を受容している者は、自己受容が有意に高いことが示された。

2. 集団によるかかわり方の違いについて

家族、部活動、仲間集団の集団間で、それぞれの集団へのかかわり方に違いがあるか調べるため、「自己主張・存在感」と「仲間受容」について分散分析を行った。ただし、学級は、大切だと思う集団として選択した人数が極端に少なかったため、これ以後の分析から除外した。その結果、「仲間受容」において1%水準で有意な差が示された($F_{(2,192)}=5.89$)。そこで、フィッシャーの LSD 法による多重比較を行ったところ、部活動が家族よりも1%水準で有意に得点が高く、仲間集団が家族よりも5%水準で有意に得点が高かった(Table 2)。よって、部活動や仲間集団を大切だと答えた者は、家族を大切だと答えた者よりも、大切だと思う集団において仲間を受容していることが示された。

3. 集団による自己受容得点の違いについて

Table 2
集団によるかかわり方の分散分析の結果

| | 集団 (N) | 平均値 (標準偏差) | |
|----------|----------|-------------|-------------------|
| 自己主張・存在感 | 家族 (148) | 31.92(5.43) | |
| | 部活動 (18) | 30.22(6.24) | |
| | 仲間集団(33) | 31.54(5.30) | |
| 仲間受容 | 家族 (148) | 14.96(2.76) | 部活>家族** 仲間>家族* |
| | 部活動 (18) | 16.76(2.32) | |
| | 仲間集団(33) | 16.28(2.38) | |

** p<.01 * p<.05

Table 3
集団による自己受容得点の分散分析の結果

| | 群 (N) | 平均値 (標準偏差) | t 値 |
|--------|----------|--------------|--------|
| 自己受容得点 | 家族 (148) | 93.60(12.20) | 家族>部活* |
| | 部活動 (18) | 86.07(12.76) | |
| | 仲間集団(33) | 90.31(14.28) | |

* p<.05

家族、部活動、仲間集団の集団間で、自己受容得点に違いがみられるかを確かめるため、集団間の自己受容得点について分散分析を行った。その結果、5%水準で有意な差が示された ($F_{(2,192)}=3.29$) ので、フィッシャーのLSD法による多重比較を行ったところ、家族が部活動よりも5%水準で有意に得点が高かった (Table 3)。よって、家族を大切な集団として選択した者は部活動を選択した者よりも自己受容得点が高いことが示された。

考 察

大切な集団へのかかわり方が深い方が自己受容が高いだろうという仮説は、「自己主張・存在感」と「仲間受容」の両方において支持された。つまり、大切だと思う集団において、自分を主張したり存在感を感じることや、その集団の成員を受容している者ほど自己受容得点が高いことが示された。

また、集団による違いについては、部活動や仲間集団においては、家族においてよりも仲間を受容する傾向が強い一方で、家族を大切な集団として選択した者は、部活動を選択した者よりも自己受容が高かった。福富 (1997) は高校生の友人関係において、仲間に対する強い同調性が見られることを示しており、保坂 (1998) も本来中学生によくみられる仲良しグループであるチャムグループが青年期全般まで肥大化してきていると指摘している。本研究において、部活動や仲間集団において仲間受容が高くなっていった点についても、高校生においても未だに互いの共通性・類似性を確認しあうチャムグルー

プが根強く存在し、仲間に対する強い同調性が現れたものと考えられる。また、家族を大切な集団として選択した者は、部活動を選択した者よりも自己受容が高かった点については、従来青年が頼りにする相手は親から同年代の仲間へと移行していくことが指摘されているが、家族を大切なものとして捉えていることが、高校生の自己受容に影響していると考えられることもできるだろう。

研究II：高校生の集団へのかかわり方が自己受容に与える影響についての発達的研究 — 家族、仲間集団、部活動に焦点を当てて —

目 的

研究Iにおいて、大切な集団として選択した人数が極端に少なかった学級を除いた、家族、仲間集団、部活動の3つの集団へのかかわり方と自己受容との関連を検討する。また、性差と学年による違いについても確かめる。

方 法

調査対象 B県立高校1年生235名 (男子144名, 女子91名), 2年生185名 (男子110名, 女子75名), 3年生146名 (男子84名, 女子62名) の計566名。

調査時期と調査実施方法 2004年1月に高校の教諭に依頼し、集団で行った。

質問紙 研究Iで使用したのと同じ構成のものを用いた。ただし、集団へのかかわり方については、仲間集

Table 4
部活動参加者における「自己主張・存在感」の平均、標準偏差および分散分析の結果

| | | 仲間集団 (N=391) | | 家 族 (N=391) | | 部 活 動 (N=391) | |
|-----------------|-----------|-----------------|-------------|-----------------|-------------|------------------|-------------|
| 1 年生 (N=165) | 男 (N=102) | 27.33(5.32) | 27.0(5.26) | 29.76(6.62) | 30.37(6.42) | 27.62(6.37) | 28.16(6.07) |
| | 女 (N=63) | | 27.87(5.42) | | 28.78(6.86) | | 26.76(6.80) |
| 2 年生 (N=139) | 男 (N=83) | 27.67(5.45) | 27.55(5.61) | 31.19(6.31) | 31.06(6.66) | 29.54(5.85) | 29.69(6.54) |
| | 女 (N=56) | | 27.84(5.25) | | 31.38(5.82) | | 29.32(4.69) |
| 3 年生 (N=87) | 男 (N=58) | 27.0(5.78) | 26.79(5.87) | 31.46(5.58) | 31.29(5.44) | 28.78(5.93) | 29.26(6.04) |
| | 女 (N=29) | | 27.41(5.67) | | 31.79(5.92) | | 28.18(5.71) |
| 主 効 果 (集 団 差) | | 家族 > 部活 > 仲間** | | | | | |
| 交 互 作 用 | | 1 年家族 > 1 年仲間** | | 2 年家族 > 2 年仲間** | | 3 年家族 > 3 年仲間** | |
| | | 1 年家族 > 1 年部活** | | 2 年家族 > 2 年部活* | | 3 年家族 > 3 年部活** | |
| | | | | 2 年部活 > 2 年仲間** | | 3 年部活 > 3 年仲間** | |
| | | 2 年部活 > 1 年部活* | | | | | |

** p < .01 * p < .05

団、家族、部活動の全てにおいて回答を求めた。また、3つの集団の中から最も大切な集団を選択してもらった。

結果と考察

1. [仮説1の検証] 学年による、それぞれの集団へのかかわり方の違いについて

仮説1の検証は、部活動参加者と部活動非参加者とに分けて行った。

まず、部活動参加者について、集団へのかかわり方について尋ねた「自己主張・存在感」と「仲間受容」のそれぞれについて、2（性別）×3（学年）×3（集団）の3要因の分散分析を行った。結果を Table 4, Table 5

に示す。その結果、「自己主張・存在感」と「仲間受容」のそれぞれにおいて、学年が上がるにつれて、家族へのかかわり方よりも仲間集団や部活動へのかかわり方が大きくなるだろうという仮説1は支持されなかった。

次に、部活動に参加していない者について、同様に、「自己主張・存在感」と「仲間受容」のそれぞれについて、2（性別）×3（学年）×3（集団）の3要因の分散分析を行った（Table 6, Table 7）。その結果、仮説1は支持されなかった。

仮説1は支持されなかったが、部活動参加者では、家族において、仲間集団や部活動においてよりも自分を主張したり、存在感を感じており、また仲間集団や部活動

Table 5
部活動参加者における「仲間受容」の平均、標準偏差および分散分析の結果

| | | 仲間集団 (N=391) | 家 族 (N=391) | 部 活 動 (N=391) |
|------------|-----------|-----------------|----------------|------------------|
| 1年生(N=165) | 男(N=102) | 15.50(2.55) | 15.17(2.64) | 14.01(3.55) |
| | 女(N=63) | | 15.05(2.55) | 13.38(3.75) |
| 2年生(N=139) | 男(N=83) | 16.01(3.00) | 16.00(3.11) | 14.57(3.76) |
| | 女(N=56) | | 16.04(2.87) | 13.86(3.23) |
| 3年生(N=87) | 男(N=58) | 15.83(2.55) | 15.71(2.41) | 14.84(2.89) |
| | 女(N=29) | | 16.07(2.83) | 13.93(3.47) |
| 主効果（集団差） | | 部活>仲間>家族** | | |
| 交 互 作 用 | 男仲間>男家族** | 男部活>男仲間** | | 男部活>男家族** |
| | 女仲間>女家族** | 女部活>女家族** | | 男家族>女家族* |

** p<.01 * p<.05

Table 6
部活動非参加者における「自己主張・存在感」の平均、標準偏差及び分散分析の結果

| | | 仲間集団 (N=174) | 家 族 (N=174) |
|-----------|---------|-----------------|----------------|
| 1年生(N=69) | 男(N=41) | 26.65(5.85) | 25.46(4.44) |
| | 女(N=28) | | 28.39(7.19) |
| 2年生(N=46) | 男(N=27) | 26.30(6.72) | 26.26(6.88) |
| | 女(N=19) | | 26.37(6.67) |
| 3年生(N=59) | 男(N=26) | 27.44(4.73) | 26.08(5.97) |
| | 女(N=33) | | 28.52(3.16) |
| 主効果（性差） | | 女>男* | |
| 主効果（集団差） | | 家族>仲間** | |

** p<.01 * p<.05

Table 7
部活動非参加者における「仲間受容」の平均、標準偏差及び分散分析の結果

| | | 仲間集団 (N=174) | | 家 族 (N=174) | |
|--------------|---------|-----------------|-------------|----------------|-------------|
| 1 年 生 (N=69) | 男(N=41) | 15.12(3.01) | 14.37(2.74) | 13.46(4.00) | 13.22(3.45) |
| | 女(N=28) | | 16.21(3.11) | | 13.82(4.74) |
| 2 年 生 (N=46) | 男(N=27) | 15.30(2.99) | 14.70(3.01) | 13.30(3.31) | 13.44(3.65) |
| | 女(N=19) | | 16.16(2.81) | | 13.11(2.85) |
| 3 年 生 (N=59) | 男(N=26) | 15.31(2.64) | 14.77(3.22) | 14.25(2.92) | 13.85(3.51) |
| | 女(N=33) | | 15.73(2.04) | | 14.58(2.36) |
| 主効果 (性 差) | | 女>男* | | | |
| 主効果 (集団差) | | 仲間>家族** | | | |

** p<.01 * p<.05

においては、家族においてよりも集団の成員を受容していることが明らかとなった。また、部活動非参加者では、家族において、仲間集団においてよりも自分を受容したり存在感を感じており、さらに、仲間集団において、家族においてよりも集団の成員を受容していることが明らかになった。

2. [仮説2の検証] 家族を最も大切だと答えた群とそれ以外の群との自己受容の違いについて

家族を最も大切だと答えた者は、そうでない者よりも自己受容が高いだろう、という仮説2を検証するため、自己受容得点について、2(性別)×3(学年)×2(家族を最も大事だと答えた群、それ以外の群)の3要因の分散分析を行った。その結果、家族を最も大事だと答えた群がそれ以外の群よりも5%水準で有意に得点が高く($F_{(1,365)}=3.88$)、家族を最も大事だと答えた者は、そうでない者よりも自己受容が高いだろう、という仮説2は支持された。これも研究Iの結果と同じであり、研究Iにおける結果が支持されたといえる。

3. [仮説3の検証] 学年による、それぞれの集団へのかかわり方の違いと自己受容との関連

低学年では家族へのかかわり方は最も大きい者がそうでない者よりも自己受容が高く、高学年では仲間集団や部活動へのかかわり方が大きい者はそうでない者よりも自己受容が高いだろう、という仮説3を検証するため、集団への関わり得点の家族が最も高かった群と部活・仲間集団が家族よりも高かった群とに分けた。そして「自己主張・存在感」と「仲間受容」において、自己受容得点について3(学年)×2(性別)×2(家族への関わり高群、部活・仲間集団への関わり高群)の3要因の分散分析を行った。その結果、主効果、交互作用ともにみられず、仮説3は支持されなかった。

4. [仮説4の検証] 部活動参加者と非参加者の自己受容得点の違いについて

部活動参加者は、非参加者よりも自己受容が高いだろうという、仮説4を検証するため、自己受容得点について、3(学年)×2(性別)×2(部活動参加者、非参加者)の3要因の分散分析を行った。その結果、主効果、交互作用ともにみられず、仮説4は支持されなかった。これは、高校生において部活動参加者は非参加者に比べて学校に適應している(白松, 1998)、という結果と一見矛盾しているように見える。しかし、仮説1の分析において、部活動参加者は部活動において、仲間集団においてよりも、自分を主張したり存在感を感じたり、集団の仲間を受容していることが明らかとなっており、高校生において部活動の存在はやはり大きなものだと考えることができる。しかし、部活動への参加自体は学校適應と関連しているものの、学校に適應していることが直接的に自分を受容していることに関連しているとは言い切れないことが示されたと言えるだろう。

研究I, IIの総合考察

研究Iでは、大切な集団へのかかわり方が深い方が自己受容が高いだろうという仮説を検証することを中心として検討した。その結果、仮説は支持され、「自己主張・存在感」と「仲間受容」の両方において、集団へのかかわりのH群がL群よりも有意に得点が高く、大切だと思う集団において自分を主張したり存在感を感じたり、仲間を受容している者は、そうでない者よりも自己受容が高いことが示された。

また、集団の種類によってかかわり方に違いがみられるかを確認したところ、部活動や仲間集団では、家族に

においてよりも、その集団の成員を受容していることが示された。どの集団を大切な集団として選択したのかによって、自己受容に違いがみられるかどうかについて確認したところ、家族を大切な集団として選択した者は、部活を大切な集団として選択した者よりも、自己受容が高いことが示された。

研究Ⅱでは、仮説Ⅰにおいて、学年によってそれぞれの集団へのかかわり方に違いが見られるかどうかを検証したが、学年によるそれぞれの集団へのかかわり方の違いはみられなかった。また、仮説Ⅱにおいて、家族を最も大切な集団として選択した者と、部活動や仲間集団を大切な集団として選択した者について自己受容に違いが見られるかを検証したところ、仮説Ⅱは支持され、家族を最も大切な集団として選択した者は、部活動や仲間集団を大切な集団として選択した者よりも自己受容が高いことが示された。これは、研究Ⅰにおいて、家族を大切な集団として選択した者は、部活を大切な集団として選択した者よりも、自己受容が高かった結果とほぼ同じ結果と言えるだろう。また、仮説Ⅲにおいて、学年による、それぞれの集団へのかかわり方の違いと自己受容との関連について検証したところ、低学年では家族へのかかわり方は最も大きい者がそうでない者よりも自己受容が高く、高学年では仲間集団や部活動へのかかわり方が大きい者はそうでない者よりも自己受容が高いという結果は得られなかった。最後に仮説Ⅳにおいて、部活動参加者と非参加者の自己受容得点の違いについて検証したが、有意な差は見られず、部活動参加者と非参加者間で自己受容に差がないことが示された。

本研究では、ある集団（例えば、家族）へのかかわり方を尋ねるといっても、人によってその集団を大切だと捉える程度に違いがあることを考慮し、まず、研究Ⅰにおいて、学級、家族、部活動、仲間集団の中から一番大切な集団を一つ選択してもらい、その集団を想定してもらい回答を求めた。その結果、学級を選択した者はわずか2名であり、そのため以後の分析においても学級を除いた3つの集団についてかかわり方を検討した。しかし、全被験者201名中、学級を選択した人数が2名だったというのは意外な結果であった。

また、それぞれの集団によってかかわり方に違いがみられるかどうかについて検討したところ、研究Ⅰでは、部活動や仲間集団において、家族よりも、その集団成員を受容していることが示された。研究Ⅱでは、部活動参加者においては、家族では、仲間集団や部活動よりも自分を主張したり存在感を感じており、仲間集団や部活動では、家族よりもその集団成員を受容しており、さらに、部活動では仲間集団よりも、自己主張したり存在感を感じ集団成員を受容していることが明らかになった（Table 4, 5）。また、部活動非参加者においては、家族

では、仲間集団よりも自分を主張したり存在感を感じており、仲間集団では、家族よりもその集団成員を受容していることが示された（Table 6, 7）。以上に述べたように、研究Ⅰでは「自己主張・存在感」において集団による違いが見られなかったが、研究Ⅱにおいては違いが見られた。これについては、研究Ⅰでは大切だと思う集団についてのみかかわり方を尋ねており、また部活動参加者と非参加者のデータを一緒に用いているため、研究Ⅱにおいては、より実際に即したかかわり方の違いについて見ることでできたと思われる。研究Ⅱの結果から、部活動参加者と非参加者との違いがいくつか見られ、部活に参加していない女子は、参加していない男子よりも、仲間集団や家族において自分を主張したり存在感を感じその集団成員を受容しているのに対して、部活動に参加している男子は参加している女子よりも家族成員を受容していることが明らかとなった。

また、Table 4～7より、高校生の、家族、仲間集団、部活動へのかかわり方は、学年による差はなく一貫していることが明らかになった。筆者は、青年が頼りにする相手の移行の過程から、学年によってそれぞれの集団へのかかわり違いがみられそれが自己受容感に影響を与えているのではないかと仮説をたてたが、仮説は支持されなかった。これについては、高校生において居場所となるような集団というものは、これと決まっているわけではなく、どのような集団であってもその人が自己主張したり存在感を感じることができると考えることもできるだろう。近年増加しつづけている高校の中途退学者（伊豆倉、2003）は、学校以外の場所に自らの居場所を求めているとも考えることもできる。時代の変化に伴い様々な価値観が広まってきている現在、高校生にとっても、学校や家庭の場だけではなくもっといろいろな場所が自分の居場所となっているのかもしれない。

しかしその一方、研究では一貫して、家族を最も大切な集団だと答えた者はそうでない者よりも、自己受容得点が有意に高いという結果が得られた。家族を大切なものだと理解し、そのことが自己受容と関連しているけれども、実際のかかわりにおいては、家族成員を他の仲間集団などに比べて受容しているわけではない。家族を大切に思っているにも関わらず、積極的に受容するというわけではない高校生の姿が垣間見えよう。青年期は大人でもなく子どもでもない境界期であるがゆえに、不安定さを併せ持つことは否めない。そのような不安定な時期ゆえに、大切だと頭では理解していても、実際のかかわり方としては積極的にはかかわることができないのではないだろうか。しかし、実際のかかわりにおいて家族成員を受容していなくても、家族を最も大切な集団だと理解していることが、自己受容感と関連しているのである。

以上を踏まえると、高校生へのアプローチを試みる際、基盤にある家族の存在を念頭に置きつつ、それぞれの個に応じた居場所的集団への視点の重要性が示唆されたと考えることができるだろう。

今後の課題

今後の課題としては、集団へのかかわり方だけではなく、他の要因と自己受容との関連について調べる必要があると思われる。また、高校と一口にいても、中高一貫校や私立の高校など様々な種類のものが存在している。本研究では、公立の進学高校を対象としたが、他の種の高校も調査対象とすることで、実際の高校生の特徴をよりの確に捉えることができるだろう。

謝辞

本論文作成にあたり、多くのご助言とご指導を賜りました九州大学大学院人間環境学研究院野島一彦先生、ご校閲賜りました同高橋靖恵先生、研究の過程で数多くの貴重なご助言をいただきました九州大学大学院浅海健一郎さん、カウンセリング研究会の皆様へ深く感謝いたします。

引用文献

- 福留 譲 1997 思春期が人生の中でもつ意味 児童心理 2月号臨時増刊, 3-12.
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) — 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討 — 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学), 37, 217-234.
- 保坂 亨 1998 児童期・思春期の発達 下山晴彦(編) 教育心理学Ⅱ 第4章 東京大学出版会 Pp.103-123.
- 伊豆倉哲 2003 「大検」目的の進路変更などが増加内外教育, 5358, 5-8.
- 片岡 彰・寺田 晃 1982 現代教師の人格特性に関する調査研究Ⅱ 日本教育心理学会第4回総会発表論文集, 704-705.
- 加藤隆勝 1962 青年期における自己受容と自己批判の年齢的変容について 岐阜大学研究報告 (人文科学), 11, 83-89.
- 楠見幸子・狩野素朗 1986 青年期における友人概念発達の因子分析的研究 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 31(2), 97-104.
- 宮下一博 1998 青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要 (教育科学編), 46, 27-34.
- 宮下一博・大野朝子 1997 青年の集団活動への参加とアイデンティティ 千葉大学教育学部研究紀要 (教育科学編), 45, 7-14.
- 宮沢秀次 1980 青年期における自己受容性測定スケールの検討 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 516-517.
- 落合良行・佐藤有耕 1996a 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44(1), 55-65.
- 落合良行・佐藤有耕 1996b 親子関係の变化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44(1), 11-22.
- Rogers, C.R. 1942 Counseling and psychotherapy. Boston: Houghton Muffin Company. (友田不二男(訳) 1966 ロジャーズ全集2 カウンセリング 岩崎学術出版社)
- 白松 賢 1998 高校生の学校生活に関する社会学的研究 — 高校生の会話と部活動の関係を中心に — 中国四国教育学会教育学研究紀要, 44(1), 189-194.